

氏 名	張 莉
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 292 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	中国古代における「五感」に関する文字の考察

論文調査委員 (主査) 教授 阿 辻 哲 次 教授 愛 宕 元 助教授 赤 松 紀 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は古代中国における「五感」、すなわち視・聴・嗅・味・触の感覚器官をめぐる問題について、甲骨文字や金文など古代文字の字形学的解釈をふまえて考察したものである。全体は七章にわかれ、「五感」をめぐる問題が総合的に取りあげられる序章に続いて、以下、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚のそれぞれについて、関連する漢字の考察を通じて各感覚の特質が概観され、最後にそのうちのいくつかが融合した「共感覚」が論じられる。またそれぞれの章においては、たとえば視覚には色彩が、聴覚には音楽がというように、それに深く関係する文化的事象にリンクして考察が展開される。

『莊子』天運や『荀子』正名に見える「五感」への言及によれば、中国では「五感」が人間に愉悦性をもたらすものとされていた。目と耳の優位性に比べて鼻・舌・皮膚が劣ったものとされる古代ギリシャ的認識に対して、中国では「五感」が並列的に語られる。なお味覚・嗅覚・触覚は視覚と聴覚に比べて曖昧な感覚ととらえられがちだが、それらに関わる漢字の構造に原初的な情操が豊かに表現されているのを見てとることができる。

視覚については、「目」を意味する記号が多く漢字に使われていく過程で、記号そのものが本来的にもっていた意味がどのように拡張されていったかが考察される。甲骨文字では目の記号に「横目」と「縦目」の2種があり、どちらも目の象形であるが、両者はしだいに意味を異にしていく。横目の例には「眉」「衆」などが、縦目の例には「臣」を含む「臥」「監」「臨」などがある。これら「目」の記号には当時の種々の社会的背景が反映され、汎用性をもちながら、さまざまな概念の造字がおこなわれていった。

聴覚については「耳」を表す記号が組みこまれて新しい漢字が創作される過程で、どのような傾向性をもって使われていったかが考察される。また「耳」は人体必須の身体器官であるだけでなく、顔の左右に対象形をなしていることから、「耳杯」などの語彙が作られたことにも触れられる。

触覚については、中国古代には「触覚」という語彙がなく、『荀子』天論に見える「形能」と、『荀子』正名に見える「形体」がそれにあたると考えられる。「触覚」という表現は仏教語として成立し、隋代に「身識」と対応した語として使われるのが初出である。それゆえ伝統的な文献においてもそれに関して該当する記述がほとんどなく、本論においては「触」の文字と『荀子』正名における「疾養滄熱滑鉞輕重、以形体異」の分類に基づいて文字の説明が試みられる。

味覚については、主として「美」と「甘」の二字が考察される。「美」は羊の肥美を意味する会意字で、祭祀の際に神意や吉祥を得るために羊が供せられたことから、それを構成要素とする「美」が単に美味の意だけでなく、吉祥や裕福をも表した。また「甘」は「五味」(酸・苦・甘・辛・鹹)を構成するうちの中間に位置し、味の調和機能という広い意味をも有する。

嗅覚に関しては「臭」について考察がおこなわれる。「臭」は《自》(=鼻)と《犬》の会意字で、最初は「におう」意であったのが、戦国後期あたりから「悪臭」の用例が急増し、それにかわって「聞」が嗅覚義の動詞として使われるようになる。「聞」の嗅覚義は気を吸入することで鼻に伝達されるもので、「気」を媒介として成り立つ。嗅覚義を有する文字は、

そのように別の共感覚を有するものが多いのが特徴である。

論文の最後に、「共感覚」を内包する文字がいくつか考察される。古代での言語や文字に見える共感覚をあきらかにすることは、古代人の感性的認識と感覚を捕捉するあり方を知るうえで非常に重要であって、それに関して本論では、「聞」と「馨」に聴覚義と嗅覚義の併存が見られ、「香」と「酸」に味覚義と嗅覚義の併存が見られ、「辛」に味覚義と触覚義が併存することなどが論じられる。これらの共感覚は嗅覚と聴覚の間が最も多く、嗅覚・味覚間がこれに次ぐ。おそらく嗅覚と聴覚における「気」の媒介や、嗅覚と味覚における化学的な刺激などの要因によって共感覚が生じていると思われる。

論文審査の結果の要旨

この論文は中国古代の「五感」、すなわち「視覚」「聴覚」「味覚」「嗅覚」「触覚」に関連して、多数の漢字を総合的に考察したものである。

身体機能に関わる漢字や語彙には古代における人々の感性が明確に反映されていて、許慎が『説文解字』叙で語った「近取諸身」とは、まさにその身体の観察による造字方法であった。著者もそれと基本的に同じ立場に立って考察を展開しており、本論においてははじめに、中国古代で「五官」及び「五感」という語がどう解釈されてきたかを概観し、さらに「視覚」「聴覚」「味覚」「嗅覚」「触覚」のそれぞれに関して、キーになるいくつかの漢字を中心に考察が展開されてゆく。

本論における考察では、甲骨文字・金文・小篆の各書体が、それぞれよりどころを明確にしながら基礎にすえられている。甲骨文字や金文の字形には、原初の字義がそのまま忠実に残っているものが多い。それが時間の経過とともに訛変し、『説文解字』に至ってまったく変容したり、原義が不明になったりしている例も少なくはないが、本論文ではできる限り、于省吾や郭沫若、あるいはわが国の白川静など先行する文字学者の解釈を忠実に伝えながら、筆者の考えが述べられるように配慮されている。

人の感覚についての言及は中国では非常に古くから見え、『莊子』天運は「五感」を「天楽」と称し、心を悦ばせるものとする。また『荀子』正名では「五感」が「天官」と称される。これらの表現においては「五感」が人間に愉悦性をもたらすものとの前提に立ってなされており、そこから筆者は、古代ギリシャにおいては目（視）と耳（聴）の優位性に比べて鼻（嗅）、舌（味）、皮膚（触）が劣ったものとされるのに対して、中国古代においては「五官」及び「五官」によって生じる「五感」が並列的に語られているのが特徴であると考ええる。

「五感」に関する文字の考察の中で、古代中国における言語や文字の共感覚を知ることは、彼らの感性認識のあり方を知る上で重要である。そこで本論文では「聞」・「馨」の各字が包含する字義に聴覚義と嗅覚義が見られることを論じ、さらに「香」・「酸」が味覚義と嗅覚義をあわせ持ち、また「辛」に味覚義と触覚義が備わっていることなどを詳細に述べる。

これらの間に共感覚が存在するとの指摘はまことにユニークなものである。共感覚においては嗅覚と聴覚にかかわるものももっとも多く、嗅覚と味覚に関するものがこれに次ぐ。嗅覚・聴覚における「気」の媒介、あるいは嗅覚と味覚における化学的な刺激による同一性が、これらの共感覚の成立に大きな影響を与えていると筆者は考えるが、このような指摘は、これまでの中国文字学の中ではいちども試みられることがなかった。

本論文のもつ意義として、これまで甲骨文字や金文など古代文字資料は主として古代史解明のため、あるいは漢字の字源解明のための基礎資料として使われるのがほとんどであったが、この論文は古代文字資料を使って人類の感性のあり方と感覚の認識方法を模索しようとしたものであって、その点でこれまでの古代文字研究の歴史と一線を画した、意欲的で重要な方向を示す著述であると評価できる。

本論文は、甲骨文字や金文をめぐる古代文字研究においては従来ほとんど未開拓であった分野に対して鋭い考察を展開している。この研究は文字と人間の文化を総合的にとらえようとする今後の研究活動に対して重要な方向を示すものであり、本学位申請論文は日本と東洋における文化の高度で総合的研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻日本文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものといえる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成17年1月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。